

## 釧路空襲体験談

寺部 美紀男

昭和12年生まれで、空襲の時は小学校4年生でした。当時の寿小学校に通っており、父が国鉄に勤めていたので、現在の浪花町にある官舎に住んでいました。防空壕は国道38号合同庁舎のあたりに掘ってあり、空襲警報が鳴るとそこへ避難するという学校生活を送っていました。

防空壕の中では、扉が爆風で空いてしまうのを大人たちが必死に押さえていました。しかし、男手は戦地に出ているので、女性か学生の力に支えられていました。

7月14日、空襲前日は夏休み中で官舎に居たので、家の中で畳を盾にして外の様子を見ていました。特に大人たちは外の様子を見たがっていて、飛行機が低い位置で飛び、かんぽう艦砲射撃も受けていました。

7月15日は、朝から爆弾が落ちていたので、一日中防空壕の中にいました。防空壕を出たのは夜、辺りが静かになった頃で、街の被害の様子はよく見えませんでした。建物が焼けていました。空襲後、近所の人が新釧路川の岸壁付近まで様子を見に行ったり、帰らぬ人となってしまいました。まだ危険なタイミングだったのだと思います。

7月16日は、叔母がいる鳥取の治水町へ疎開しました。当時は釧路ガスあたりから鳥取村だったので、疎開という形になりました。疎開先へ歩く道中は、えんぼく燕麦畑が広がっていました。

空襲は北大通、南大通方面の被害が大きく、病院にも爆撃があったことを覚えていません。幣舞橋に爆弾が落ちて橋が欠けていて、その破片が、現在の道東経済センタービルのあたりにまで飛んでいました。

幸いにも、寿のあたりは被害が少なく同級生も生きていました。野菜やお米の買い出しは斜里まで車で行っていましたが、駅に着くと没収されてしまうので、駅裏で荷台

から投げ下し、みんなに配っていました。食料確保のために、汽車に乗せてもらって大  
楽毛へ行き、釣りをしたこともあります。当時は物々交換をしていたので、母の着物は  
ほとんど手放していました。

今の日本は被爆国として、戦時中の国へもっと支援をしても良いと思います。移民の  
受け入れや仕事を与えるなど、できることはあると思っています。